

『現代生命哲学研究』第10号(2021年3月):1-38

<小特集：反出生主義>

デイヴィッド・ベネターの誕生害悪論はどこで間違えたか

生命の哲学の構築に向けて(12)

森岡正博*

目次

- 1 はじめに
- 2 *Better Never to Have Been* 第2章パート1の構造
- 3 *Better Never to Have Been* 第2章パート2の構造
- 4 *Better Never to Have Been* 第2章パート3の構造
- 5 *Better Never to Have Been* 第2章パート4の構造
- 6 *Better Never to Have Been* 第2章に関する結論
- 7 補足1および補足2
- 8 ベネターはどのように議論を組み立てるべきであったのか

1 はじめに

デイヴィッド・ベネターの *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence* (邦訳『生まれてこないほうが良かった』すずさわ書店) の第2章で、彼はいわゆる誕生害悪論に説得力があることを論証しようとした。感覚を持つ存在にとって生まれてくることは害悪に他ならず、生まれてくることは生まれてこないことに比べて悪いというのである。(「誕生害悪論」という言葉をベネター自身は使用していないが、便宜上、本論文ではこの言葉を使うことにする)。この第2章は同書でもっともオリジナリティが高い箇所である。そしてその帰結が直観に反することから、多くの哲学者たちから反論が出されてきた。ベネターはそれらの反論に論文で再反論を行なっている。

私は2013年に論文「「生まれてくること」は望ましいのか—デイヴィッド・ベネターの『生まれてこなければよかった』について」を刊行し、ベネターの誕生害悪論を批判的に日本に紹介した。しかし当時はまだ研究が熟していなかったため、不正確な記述が見られる議論となっている。その後、私は2020

* 早稲田大学人間科学部教授

電子メール：<http://www.lifestudies.org/jp> の送信フォームより

年に『生まれてこないほうが良かったのか?』を刊行し、その第7章にてベネターの誕生害悪論が誤りであることを「存在」と「生成」の視点から論証した。私はこの論証は有効であると考えているが、これはある意味、外在的な批判である。

そこで本論文では *Better Never to Have Been* のテキストに沿って内在的にベネターの論述を理解することを試み、彼の論理進行のどこに間違いがあるのかを調べていくことにする。本論文の内在的批判と拙著の外在的批判の両方をもって、誕生害悪論の問題点が浮き彫りになると私は考える。

2 *Better Never to Have Been* 第2章パート1の構造

Better Never to Have Been (以下、BNHBと略す) で誕生害悪論の基本的論理が展開されているのは原著28~42頁である。そこで、その箇所では何が述べられているのかをパラグラフごとに要約し、その論理進行を追っていきたい。

まず当該箇所の全体構造を見ておく。当該箇所は4つのパートから成っている。

パート1 (pp.28-31) 快苦の基本的非対称性¹ 1・2・3・4。

パート2 (pp.31-37) この基本的非対称性は、確からしい4つの非対称性をうまく説明することができる。

パート3 (pp.37-39) 4象限図では対称性は成立しない。よって快苦の非対称性が正しい。

パート4 (pp.40-42) 生まれてこないことは、生まれてくることより優越する。

所々でベネターの論理進行が追えない箇所があるが、それについてはそのように記す。以下、ある頁に最初に表われるパラグラフを para.1 と表記する。[PP.28-29, Para.3]は28頁のパラグラフ3でありそれは28頁から29頁にかけて存在することを意味する。

それではパート1から見ていこう。ここは、快苦の基本的非対称性(1)(2)(3)(4)が導入されるパートである。

[PP.28-29, Para.3]

このパラグラフの直前に「Why Coming into Existence is Always a Harm」との小見出しがある。このパラグラフでは、「生まれることは常に always 害である」

¹ Benatar (2013), p.128 でベネターはこの4つの命題の束を「基本的対称性 the basic asymmetry」と呼んでいるので、以降この言葉を使う。

と「生まれることは必ず **necessarily** 害である」の区別がなされる。もし善だけしか含まず、悪を含まない人生があったとしたら、それは害 **harm** でも益 **benefit** でもないとは言える。しかし実際問題、そんな人生はなく、すべての人生はいくばくかの悪を含むから、生まれることは「常に害である」と言うべきである。

[P.29, Para.1]

存在する者のみが害を被り、存在しない者は害を被らない。
これは、ベネターにとって非常に重要な点である。

[PP.29-30, Para.2]

ところで、人生において善の総量が悪の総量を上回ったら、人生は生きるに値するのではないか、という反論を楽観主義者はするだろう。

このパラグラフまでは、ベネターは善 **good** と悪 **bad** という対比で語っている。

[PP.30-31, para.1]

このパラグラフの直前に「**The asymmetry of pleasure and pain**」という小見出しがある。このパラグラフで快 **pleasure** と痛み **pain** が導入される。前パラグラフの、「人生は生きるに値する」という見解は間違っている。というのも、害（痛みなど）と益（快など）には根本的な違いがあるからだ。このことから、存在は非存在 **non-existence** より優越性 **advantage** を持っていないし、相対的な複数の非優越性 **disadvantages** を持っていることが導かれる。

ここでベネターは自分の議論の結論を先取りして提示している。ベネターはこのパラグラフの註 22 で大事なことを言っている。「非存在 **non-existence**」という言葉は「決して存在しない人 **those who never exist**」と「現在存在しない人 **those who do not currently exist**」を指し、後者はさらに「まだ **not yet** 存在しない人」と「もはや **no longer** 存在しない人」に分かれる。現コンテキストでは、「非存在」という言葉で「決して存在しない人」を意味するとベネターは書いている。

さて、ベネターが言うには、次は議論の余地がない **uncontroversial**²。

² ただし、エリザベス・ハーマンは、存在する人物 X が持つところの、腹が減ったとか、疲れたなどの悪い経験について、「それらの経験はときおり **neutral** であるばかりか **good** できえある」と指摘する (Harman (2009), p.782)。これは (1) は必ずしも成立しないという見解である。これに対しては、ベネターはおそらくそれらの悪い経験が **good** に見えることがあるのは、その悪い経験が後の良い経験を準備するからであると答えるだろう。もしその悪い経験が後の良い経験にまったく結びつかないのであれば、その悪い経験は悪いとしか言えないというわけである。この点に関しては他にも議論すべきことがあるので、別の機会に議論することとしたい。

(1) 痛みの現存 **presence** は悪い。

そして

(2) 快の現存は善い。

そして「私は次も真であると思う **it strikes me as true**」とベネターは言う。

(3) 痛みの不在 **absence** は善い、たとえその善さが誰によっても経験されないとしても。

(4) 快の不在は悪くない **not bad**、この非存在が剥奪であることになる誰かがいないかぎりにおいて。

この4つのセットが基本的対称性である。(ベネターは、快不快のあるなしについては **presence** と **absence** を使用し、人物の存在と非存在については **existence** と **non-existence** を使用している)。

ここで(3)について、痛みの不在を経験できる人がどこにもいないのだったら、それはいったい誰にとって善いことになるのか?と疑問に思う人がいるかもしれない。でもそれは勇み足であるとベネターは言う。

[PP.30-31, para.2]

ベネターはここで反事実条件法を導入することによって、この問題を解決しようとする。(3)は、現に存在している人の場合と、決して存在しない人の場合に分けて考えることができる。

まず、現に存在していて痛みを感じている人の場合、もしその人が存在しなければ痛みを感じないのだから、痛みの仮想的な不在は、現に存在しているその人にとって、仮想的な意味で善い (**would have been good**)。

次に、決して存在しない人の場合、もしその人が存在していたとしたら、その人は痛みを感じたのだから、痛みの不在は、実際には存在せず仮想的にのみ存在する人にとって、善い (**good for the person who could have existed but does not exist**)。

これが、「痛みの不在を経験できる人がどこにもいないのだったら、それはいったい誰にとって善いことになるのか?」という疑問に対するベネターの答えである。(オリジナルテキストではもう少し複雑な説明をしている。上記の説明には森岡の解釈が入っている)。反事実条件法を駆使したこの答えが正しいかどうかについては、判断が分かれるであろう。

3 *Better Never to Have Been* 第2章パート2の構造

ベネターは、次に、我々みんなが承認するであろう確からしい4つの非対称性を例に取り上げ、前パートで提唱したベネターの基本的非対称性が、それらの確からしい4つの非対称性をうまく説明できることを示す。(本パートで取り上げられる確からしい非対称性の数は4つであり、前パートでベネターが提唱した基本的非対称性も4つの命題から成るので、非常に紛らわしい)。

[PP.31-32, para.1]

(3)と(4)の非対称性を頭ごなしに否定する人を説得するのは期待薄なので、私が示せるのは、以下の確からしい *plausible* 見解を受け入れる人はおのずと私の結論に導かれるということだけである。(ベネターの2012年論文では、ベネターの基本的非対称性が以下の4つの確からしい非対称性をもっとも良く説明できると書いている)³。その確からしい見解とは、以下の4つの非対称性である。

[P.32, para.1]

【第一の非対称性：生殖義務の非対称性⁴】。(3)と(4)の非対称性は、次の確からしい見解の最良の説明となる。つまり、苦しむ人々を生み出す *bring into existence* のを避ける義務はあるが、幸せな人々を生み出す義務はないという見解である。前者は自明である。後者の理由は、産み出された人々の快は彼らにとって善だろうが、非存在であるがゆえに快がないということはまだ生み出されていない彼らにとって悪くはない *not bad* だろうからだ *while their pleasure would be good for them, its absence would not be bad for them*。(前者の *them* は存在する人々、後者の *them* は実際には存在せず仮想的にのみ存在する人々を指す)。

まず気づくのは、ベネターがここまでの箇所まで、なぜ(4)が *not bad* と言えるのかという説明を行なっていないことである。(4)が *not bad* だというのは [PP.30-31, para.1] でベネター自身の直観として導入されただけであり、なぜそれが正しいのかという根拠の説明は行なわれていない。その単なる直観をさらに根拠にして、「幸せな人々を生み出す義務はない」ということを説明している。ここで言えているのは、もしベネターの(4)の個人的直観が正しいと仮定したら、「幸せな人々を生み出す義務はない」ということが説明できるということである。しかしこれを根拠としてベネターの(4)の個人的直観が正しいと推論す

³ Benatar (2012), p.129.

⁴ 「生殖義務の非対称性」という言葉はBNHBにはなく、Benatar (2012)にある言葉。以下同様。

ることはできない。つまり（４）の真偽は依然として未決である。

その証拠に、[PP.30-31, para.2]で痛みについて使用したベネターの論理をここに当てはめると、生み出されていない人の場合、もしその人が生み出されたとしたら、その人は幸せを感じたのだろうから、幸せの不在は、実際には存在せず仮想的にのみ存在する人にとって悪い **bad**、と結論づけることができる。これは（４）の **not bad** という結論と正反対である⁵。

この点はマグヌソンも指摘している。すなわちマグヌソンは、もし痛みの非存在についての論理が成立するのならば、それをそのまま（４）に適用して、「同じ視点から判断したときに益の不在は悪い **bad** と主張しても、なんら不都合なことはない」と結論している⁶。マグヌソンの批判は正しいと言えるだろう。（もしベネターが、痛みと快のあいだには非対称性があるのだから、痛みについて適用した論理をそのまま快について適用することはできないと反論するならば、それこそがそもそも証明すべき論点だったはずだから論点先取の誤りに陥ることになる）。

以上から分かるのは、ベネターは「第一の非対称性の説明としてもっとも良いのはベネターの基本的非対称性だ」と主張しているのであり、「第一の非対称性の検討によってベネターの基本的非対称性の正しさが証明される」とは主張していないということである。これは、今後の３つの非対称性についても当てはまる。この点は重要なので注意しておく必要がある。

さらにはこの箇所でも、善悪と義務の単純な同一化が行なわれている疑いがあるが、それを見るためにも次パラグラフに進もう。

[P.32, para.2]

ベネターは、快苦の非対称性を使わなくても第一の非対称性を説明することはできるとする論者がいるだろうと言う。それは、「我々は害を避けるネガティブな義務を負うけれども、幸せを生み出すポジティブな義務は負わない」とする論者である。たしかにこの論で第一の非対称性が説明できることは認めてもいいだろうとベネターは譲歩する。この譲歩によって、ベネターは、自身のセオリーのほかにも、第一の非対称性をうまく説明できるものがあると認めたことになる。ここは確認しておきたい。

この直後のコンテキストの転換は唐突である。ベネターは、「しかしながら、「我々にはポジティブな義務がある」とまさに考える人々のなかで、その義務のなかに幸せな人々を生み出す義務が含まれると考える人はほんのわずかである」と言う。なぜいきなりこの話に飛ぶのか、私には理解できない。だが彼の議論を

⁵ この **bad** を、後に導入される **neutrality** として考えたとしても、それと **bad** は矛盾する。

⁶ Magnusson (2019), p.677.

追ってみよう。

[PP.32-33, para.3]

ポジティブな義務があるとする多くの論者は「産み出す義務」までは主張しないのだが、彼らがそこまで行かない理由は、産み出す義務を言い出すとそれは現存人とくに妊娠女性に多大な犠牲を強いることになるからである。

[P.33, para.1]

しかしこの論の難点は、もし万一それらの犠牲が解決されたとすれば、我々は幸せな人々を生み出す義務があるだろうということになってしまう点にある。これはやはりおかしいであろうとベネターは言う。ここから分かるのは、生殖義務の非対称性は、生殖の道徳的理由の非対称性 *an asymmetry of procreative moral reasons* に依拠しているということである。それは、生まれてくるであろう人々の可能的な利害を考慮したときに、我々は不幸な人々を生み出すのを避ける強い道徳的理由を持つが、幸せな人々を生み出す強い道徳的理由は持たないという非対称性である。したがって、犠牲という理由はここでは働いていないと彼は言う。

このようにして、ベネターは、子産みについて、義務の非対称性と、善悪の非対称性に加えて、道徳的理由の非対称性をも持ち出すことになる。彼の議論はここで終わっているのだから、なぜこれら三つの非対称性が重ね合わせられて、そのうちの一つが言えれば他にも同様に言えることになるのかは説明されていない。非常に中途半端な議論との印象を受ける。この点はブーニンも指摘する。ブーニンは、ベネターが善悪の比較の次元の議論からただちに義務の次元の答えを導いているが、この二つの次元のあいだにはギャップがあるのであって、ただちにそれを重ね合わせてはならないとしている⁷。この点についてはブーニンの指摘が正しいであろう。

ところで、前々パラグラフのコンテキストの唐突な転換については、次のように解釈できる可能性がある。

ベネターは、幸せという善い状態を生み出す義務がないのは、無の状態が *not bad* であるということによって説明できるとしていた。すなわち、

good → *bad* の場合⁸： 生み出さない義務がある

not bad → *good* の場合： 生み出す義務はない

と対応付けて説明している。しかし、それなら

bad → *good* の場合： 生み出す義務がある

⁷ Boonin (2012), p.19.

⁸ この「→」は時間の経過ではなく、「生成」を表わしている。

となりそうである。これは明らかに直観に反するから、誤りであるはずだ。だがベネターの説では、そもそも人が存在しないときにそれが **bad** になることはない。(2)は **good** であり、(4)は **not bad** だからだ。したがって、この **bad** → **good** という場合は考えなくてもよい。むしろそれを想定して苦しむべきはベネターの批判者の側である。なぜならベネターの批判者は(4)を **bad** とするので、彼らは「幸せな人々を生み出す義務がある」と主張しなくてはならないはずだからである。いくら「犠牲」を言い訳にしたとしても、犠牲がないときにはやはり生み出す義務があることになり、これは明らかにおかしいであろう。だから、そもそも(4)を **bad** とする批判者は間違っているのだ。これがベネターのそもそも言いたかったことである可能性はある。

ただし、もしそうだとすると、批判者は、「我々は害を避けるネガティブな義務を負うけれども、幸せを生み出すポジティブな義務は負わない」という理論をもって **bad** → **good** の場合を説明することは十分に可能であるし、それが可能であることはベネター自身が[P.32, para.2]で認めていた。

以上の検討から、第一の非対称性については、ベネターのセオリーを採用しなくても義務の非対称性で説明できてしまうので、ベネターのセオリーに優位性はないことが分かる。

[P.34, para.1]

【第二の非対称性：期待される益の非対称性】。生まれてくる子どもに益があるだろうという理由でもって、子どもを産むのは(不整合ではないとしても)奇妙である。しかしポテンシャルな子どもの利害を考慮して、子どもを産むのを控える根拠とするのは奇妙ではない。ベネターの2012論文では、後者は、「生まれてくる子どもが苦しむだろうという理由でもって、子どもを産まないのは奇妙ではない」と修正されており、このほうが意味はクリアーである⁹。

これは、「まだ生まれてきていないから存在していない子ども」を念頭に置いたときに、「その仮想的な子どもが現実の子どもになったときに苦しい人生を送る」というのは子産みを控える理由になるが、「その仮想的な子どもが現実の子どもになったときに益がある人生を送る」というのは子産みをする理由にはならないだろうということである。第一の非対称性との違いは、第一のほうは親の義務についての非対称性だが、第二の非対称性は生まれてくる子どもの益と害が子産みの判断(理由付け)にもたらす非対称性である。基本的非対称性はこのケースも説明できるとベネターは言う。たしかにもしベネターのセオリーが正しければ、第二の非対称性は説明されるだろう。なぜなら、(4)が **not bad** なら、そこから(2)の **good** へと生成する必要性がないからである。

⁹ Benatar (2012), p.129.

だがそのうえで、この議論の全体には問題がある。なぜなら、生まれてくる子どもに益があるだろうという理由でもって子どもを産むのが奇妙ではないケースがあり得るからである。つまり第二の非対称性はベネターの言うような形では必ずしも成立しないからである。そのケースについては次項でまとめて説明する。

[PP.34-35, para.2]

【第三の非対称性：回顧的な益についての非対称性】。ベネター(2012)の記述で説明する。不幸な子どもが生まれてきたことを親が残念に思う **regret** のは、子ども自身のことには思いをはせて残念に思うのだが、幸せな子どもが生まれてこなかったことを親が残念に思うのは、親自身の不幸を思って残念に思うのであって子ども自身のことには思いをはせて残念に思うのではない。なぜなら子どもは非存在なのだから、その子の不幸に思いをはせて残念に思うことはあり得ない。ここに回顧的な益についての非対称性がある。基本的非対称性はこの非対称性をうまく説明できるとベネターは言う。「子どもが生まれてこなかったことを我々がなぜ子ども自身のことには思いをはせて残念に思わないのかと言えば、快の非存在が悪くない **not bad** からである」。

ベネターは、このように、子どもが存在していないのは **not bad** だから、その存在していない子どもを存在させられなくても、そのことを残念に思わないのは当たり前のことであると主張する。

ベネターのこの議論は明らかに間違っている。ここで次のようなケースを想像してみよう。ある女性が人工授精による妊娠を決断し、家族みんなでそれを喜び、歓迎し、老衰した祖母も死ぬ前に孫を抱けると喜んだ。この女性は子どもがいま生まれてきたら、祖母に温かく迎えられる幸せをその子は得ることができると楽しんだ。しかし人工授精による卵管内受精が失敗し、妊娠は起きなかった。この家族は子どもが生まれてこなかったことを非常に悲しんだ。このチャンスを逃すと、祖母はもう亡くなってしまうだろうからである。この場合、子どもが生まれてこなかったのを家族が残念に思った理由の大きなひとつとして、その子が生まれてきていたら祖母に抱かれて温かく迎えられる幸せを経験できただろうに、それがかなわなかったという、まだどこにも存在しないその子自身のことには思いをはせて悲しんだという理由が含まれている。ここでは、非存在の子どもに思いをはせて残念に思うということが成立している。すなわち、ここでは第三の非対称性が成り立っていないのである。

第三の非対称性は一般的には成り立たないのだから、ベネターのこの箇所の議論はあまり意味がない。私の以上の議論では、非存在の人間に思いをはせて何かの判断をすることはできるとしているが、ベネターもまたそういうことは可

能であると[PP.30-31, para.2]で主張しているのだから、問題はない。上記のケースは、第二の非対称性にも同様に適用できる。

[P.35, para.1]

【第四の非対称性：遠く離れた苦しみと幸せな人々の不在の非対称性】。無人島の例で考えてみる。遠くの島に人が住んでいて、その人たちが苦しんでいるとしたら、我々は悲しく思うだろう。しかしながら、もしその島が無人島だったとき、その島に幸せな人々が住んでいないと言って我々は悲しく思ったりはしないだろう。ここで比較されているのは、存在する苦しい人に対して我々が取る態度と、存在しない幸せな人に対して我々が取る態度であり、そのあいだに非対称性があるというのである。この非対称性を、基本的非対称性はうまく説明できるとベネターは言う。

[PP.35-36, para.2]

しかし反論があるだろうとベネターは言う。無人島の場合、その島に苦しむ人々が住んでいないと言って我々は喜びを感じたりもしないだろうから、そこはどうなっているのかという反論である。ベネターは、この場合に悲しく思うことの反対は、喜びを感じるのではなくて、その状態を **welcome** すること、あるいは単に **good** であるとするところであると言う。したがって「もし苦しみの不在は人が存在しないことの良い特徴 **good feature** かと尋ねられれば、我々はその通りだと答えなくてはならないだろう」。要するに、幸せな人が存在しないことは悲しいことではないし、苦しむ人が存在しないことは良いことである、とするのである。

第四の非対称性についても、ベネターの議論には欠陥がある。なぜなら、第四の非対称性もまた必ずしも成立しないからである。たとえば、その無人島には全自動で無人で機能する豪華なホテルがあり、お客さんが訪ねてくれることを島の外側にいる設計者たちは待ち望んでいた。もし無人島にお客さんがいたとしたならばその仮想的なお客さんは豪華ホテルで幸せになっていただろうから、その島にお客さんがいないことは、島の外側からそれを眺めている我々にとって悲しいことであり得る。第四の非対称性は、人を生み出すことに関わるものではないから、この豪華ホテルの例が適用できる。

もちろんこの豪華ホテルのケースにおいて、たとえお客さんがいないことが悲しいとしても、その悲しさは島に存在する人が苦しんでいるのを見たときの悲しさとは質的にまったく違うだろうという指摘があり得る。それは正しいのだが、しかしその質的な悲しさの差異は、ベネターの言うような「一方においては悲しいが、他方においては悲しくない」という「悲しみの存在と非存在」の非

対称性とは異なると考えるべきである。したがって第4の非対称性にも大きな問題がある。

[P.36, para.1]

以上で、基本的非対称性は、上記の4つの確からしい非対称性を説明し得たとベネターは言う。もし4つの非対称性が広く支持されるとしたら、基本的非対称性もまた広く支持されるはずだ。しかしだからと言って「これはその真理性のエビデンスにはならない。というのも我々は間違い得るし、実際よく間違ふからだ。しかしながら、私の出発点はけっこうな説得力をもっているはずだということとは示された」。

ここまでがベネターの4つの非対称性を用いた基本的非対称性の妥当性の説明である。

繰り返しになるが、ベネターはこれらの検討によって、ベネターの基本的非対称性が論理的に論証されたとは考えていない。ベネターの行なったのは、(4)の *not bad* という彼自身の直観を前提とすれば、それは広く確からしいとされている4つの非対称性をすべて説明することができるという説明である。またこれは、ベネターのセオリーに匹敵するかあるいはそれを上回るライバルセオリーが出てきたら、それに負けるかもしれないということでもある。実際、ブーニンは2012年にそのようなライバルセオリー (RSP) を提出し、自分のほうがベネターよりも優れていると主張した。ベネターはそれに2012年論文で反論しているが、勝敗がついたとは思えない。

パート2についての森岡の結論を述べておく。まず、4つの非対称性のうち、問題なく成立するのは第一の非対称性のみであり、第二・第三・第四の非対称性はベネターの言う形では成立しない。したがって、ベネターの基本的非対称性によってその3つを説明できたとしても、それはけっしてベネターのセオリーの決定的な優位性を示すことにはならない。そして第一の非対称性については、ベネターの説明を取らなくてもそれを説明できる他のセオリーがあることをベネター自身が認めている。

よって、パート2に関するベネターの論述には大きな難点がある。

このパラグラフの後、パート3までのあいだに2パラグラフあるのでその要点のみを見ておきたい。

[PP.36-37, para.2]

ここではポジティブ功利主義へのコメントがなされている。

[P.37, para.1]

第7章の議論の帰結はさらに直観に反するものになるという予告がなされている。

4 *Better Never to Have Been* 第2章パート3の構造

[PP.37-38, para.1]

ここからベネターは4象限図を用いて、「生まれることは常に害である」ことを説明していく。図2.1は、すでに述べた4つの基本的非対称性を4象限にまとめたものである。

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Bad)	(3) Absence of pain (Good)
(2) Presence of pleasure (Good)	(4) Absence of pleasure (Not bad)

Figure 2.1.

[P.38, para.1]

このパラグラフでは、図2.1が説明される。内容は[PP.30-31, para.1]と同じである。

[P.38, para.2]

図2.1では(3)と(4)が非対称だが、ここを対称的に理解しようとする反論者の議論はすべて失敗するとベネターは言う。対称的に理解しようとする議論が失敗する以上、(3)と(4)は非対称でなければならない、というのがベネターの戦略である。ベネターはここで背理法を使おうとするわけである。

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Bad)	(3) Absence of pain (Good)
(2) Presence of pleasure (Good)	(4) Absence of pleasure (Bad)

Figure 2.2.

[PP.38-39, para.3]

【第一の対称性】。たとえば図 2.2 は、(4) を **bad** とすることによって対称性を保たせたものである。しかし、(4) が **bad** だという判断は強すぎる。というのも「もしシナリオ B の快の不在が **not bad** ではなく **bad** だとしたら、我々は X が生まれてこなかったことを、X 自身に思いをはせて、残念に思わなければならない。だが、これはぜんぜん残念なことではない」。

ベネターは[PP.34-35, para.2]の第三の非対称性の議論を下敷きにしてこのように述べるのだが、すでに見たように、第三の非対称性は必ずしも成立していないから、ベネターのここでの議論もまた成立しない。

[P.39, para.1]

【第二の対称性】。もうひとつの対称性の議論は図 2.3 である。この図もまだ誤っているとベネターは言う。

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Bad)	(3) Absence of pain (Not bad)
(2) Presence of pleasure (Good)	(4) Absence of pleasure (Not good)

Figure 2.3.

[P.39, para.2]

この図の（3）の not bad は「悪いのでもないし、善いのもない not bad, but not good either」としなければ意味が通らない。しかしこの解釈では弱すぎるとベネターは言う。「痛みが存在するのを避けるのは単に ‘not bad’ である以上のことだ。それは good なのである。Avoiding the pains of existence is more than merely ‘not bad’. It is good」。

ベネターはここで大事なことを言っている。すなわち（（1）と（3）を比較したうえでの）痛みの回避、すなわち（3）にとどまることについては not bad とすべきではなく、good とすべきだとするのである。この点については後にもう一度戻ってくることにする¹⁰。

[P.39, para.3]

（4）についても同様に（単に）not good とするだけでは弱い。もちろん（4）は good ではないから、（4）は not bad か bad かになるが、私が提案するのは「悪いのでもないし、善いのもない not good, but not bad either」である。「そして not bad は not good よりも情報量の多い判断であるから、私は not bad のほうを選択する Because ‘not bad’ is more informative evaluation than ‘not good’, that is

¹⁰ またベネターはこの箇所、痛みの回避に関しては、not bad よりも good のほうが強い（優越する）と常識的に考えている。後に（[P.41-42, para.2]以降）ベネターは、快については good よりも not bad のほうが強い（優越する）というふうに逆の主張をするので、この箇所は注目しておいてよい。

the one I prefer」。もし(4)は not good なのだと反論者が言い張ったとしても、すでに述べたように(3)は good でなければならないから、結局、対称性は崩れるのであるとベネターは言う。

ここでベネターが「情報量が多い」から not bad を選択すると言っているのは非常に理解しにくい。この箇所だけ読むと意味が分からないが、実はベネターの2012年論文を読むと、ここをどう解釈すればよいのかが分かる。それは、「(4)は内在的に not bad, but not good either でありかつ相対的に(2)より not worse である」という事態を言い表すのに「not bad」一言で大丈夫だが、「not good」だと言だけでは言い表わせない(具体的には「not good」という言葉では not worse という面が言い表わせない)。この意味で(2)と(4)の比較という面を考慮すれば、not bad は not good よりも情報量が多いと言える。したがって、not bad で(4)を代表させてよいというものである。この点については、【補足1】をご覧ください。

しかしながら、ベネターの議論は非常に苦しい。ベネターは、(4)は「悪いのでもないし、善いでもない not good, but not bad either」と明言している。つまり(4)は not good と言ってもいいし、not bad と言ってもいいのである。ところがここに、「(4)は相対的に(2)よりも not worse である」というベネターの直観が論点先取的に密輸入されてきて、「not bad, but not good either」と「not worse」の両方を一言で言える言葉として「not bad」が経済的な理由で選択されたのである。そして(4)に not bad が書き込まれるのだが、それでは(4)に内在する not good はいったいどこへ消えてしまったのか？(4)に内在する not good をこのパラグラフでうやむやにしているところに、ベネターの議論の不誠実さがある¹¹。

以上、ベネターによる第一の対称性の批判も、第二の対称性の批判も不十分である。したがって、「二つの対称性の議論が間違っているから背理法によって非対称性の議論が正しい」というベネターの主張は十分には成立していない。

5 *Better Never to Have Been* 第2章パート4の構造

[PP.40-41, para.1]

このパラグラフの前に Comparing existing with never existing との小見出しがある。ここからシナリオAとシナリオBの善さの比較の議論に移ることが示され

¹¹ ベネターは1997年の論文「なぜけっして生まれてこないほうが良いのか」において、BNHB第2章の原型を発表しているが、そこでは「情報量の多さ」という説明方式は取らずに、「“not bad”は“not good”よりもより完全な評価だからだ a more complete evaluation」と説明している(Benatar (1997), p.348)。この「より完全な評価」という説明の仕方も非常に分かりにくい。

ている。

生まれることと、決して生まれないことのあいだの、相対的な優位性と劣位性を、(1)と(3)、(2)と(4)の比較で考えていく。「最初の比較((1)と(3)の比較)によって我々は非存在が存在より好ましいことを見る。非存在は存在よりも優位性を持つのである。しかしながら第2の比較((2)と(4)の比較)によって、存在するものの持つ快は、もちろん **good** ではあるが、非存在よりも優位に立つわけではない(ことが分かる)。なぜなら、快の非存在は **not bad** だからである。というのも、**the good** が非存在よりも優位に立つためには、その **the good** の非存在は **bad** でなければならないからだ」。

ここでベネターは、以降の議論の結論を先取りして示している。したがってこの文章を読んだだけでは、なぜそうなるかという理由を発見することはできない。

[P.41, para.1]

このパラグラフから、相対的な善さ悪さ **better or worse**、比較したらどっちが優位に立つのか **advantage or disadvantage** が論点になっていく。

ベネターは次のような反論、すなわち **good** は **not bad** より優位に立つ **advantage over**、なぜなら快の感覚はニュートラル **neutral** な状態より善いからだ、という反論があるかもしれないと指摘する。しかしそれは、存在しないから快がないことを、存在していて快がないことと同一視するという誤りに陥っているのだと言う。

ベネターは快が剥奪されるケースに注意を促す。すなわち、快が剥奪されて快が存在しなくなった場合、それは **bad** である。しかしこのときの **bad** は、痛みの存在が **bad** であるというときの **bad** とは意味が異なる。快が剥奪されて快が存在しなくなった場合の **bad** は、「内在的にではなく相対的に **bad**」なのである **relatively (rather than intrinsically) bad**。言い換えれば、快が剥奪されて快が存在しないのは、快が存在するときと比較して **worse** である、ということなのである **It is worse than the presence of pleasure**。ベネターはこうして、論点をじわじわと比較の文脈に移していく。

そしてベネターは、上記の議論はあくまで存在者同士の比較をしたものだと指摘する。存在者の経験する快については、それがあの場合とない場合で相対評価をすることができる。しかし存在者と非存在者のあいだでそれと同じ比較はできない。「シナリオBにおける不在の快は、上記と対照的に、(存在する)人間のニュートラルな心的状態ではない。不在の快は、人間の心的状態ではまったくないのである。シナリオAで存在する快は、シナリオAで存在しない快よりも善いのだが、シナリオAで存在する快は、シナリオBで存在しない快よりも善い、

ということにはならない Although the pleasures in A are better than the absent pleasures in A, the pleasures in A are not better than the absent pleasures in B」。

ベネターが言いたいのは、(2)と(4)の比較は、人が存在する場合と存在しない場合を比較しているのだから、それを人が存在する場合同士の比較と混同してはならないということである。そして、人が存在する(2)の場合と、人が存在しない(4)の場合を比較すれば、(2)は **not better than** (4)であることになると言う。これがベネターの結論なのであるが、しかしそう言える理由はまだ示されていない。その理由は次のパラグラフではじめて示されることになる。(ちなみに、この存在するもの同士の比較と存在と非存在の比較の差異については、ベネターの2013年論文で議論が補われている。本論文【補足2】をご覧ください)。

[PP.41-42, para.2]

このパラグラフがベネターの結論部分である。

「私が、剥奪された結果として快が不在なのは **bad** であると言うとき、私は **intrinsic badness** について語っているのではない。それと同様に、私が、剥奪の結果としてではない快の不在について語っているときもまた、私は **intrinsic 'not badness'** (つまり **neutrality**) について語っているのではないのである」。(neutralityについては【補足1】参照)。

そしてベネターは次のように主張する。

「ちょうど、剥奪された結果として快の不在が **worse** という意味で **bad** であるのと同様に、剥奪の結果としてではない快の不在は **not worse** という意味で **not bad** なのである。後者の快の不在は、快の現存よりも悪くない (**not worse than**) のである **Just as absent pleasures that do deprive are 'bad' in the sense of 'worse', so absent pleasures that do not deprive are 'not bad' in the sense of not worse. They are not worse than the presence of pleasures**」。

「ここから、快の現存は快の不在よりも善くないこと **not better**、したがって快の現存は剥奪の結果としてではない快の不在よりも優越性を持たないことが導かれるのである **It follows that the presence of pleasures is not an advantage over absent pleasures that do not deprive**」。

このようにして、(2) **is not better than** (4)、すなわち (4) **is not worse than** (2) ということが立証されるとベネターは言う。そして **not better** とは両者の善悪が同じかあるいは前者が **worse** であることを意味し、**not worse** とは両者の善悪が同じかあるいは前者が **better** であることを意味する。したがってこの二つを合わせれば、(4)は(2)と善悪が同じかあるいは(4)が(2)より **better** であることになる。このような等号を含んだ「より善さ」のことをベネターは優

越性 *advantage* と呼んでいると考えられる。したがってベネターは (2) は (4) より優越性を持たないと結論するのである。これが立証されれば、(3) *is better than* (1) と合わせることで、*coming into existence is always a harm* が導出されることになるというわけである。

しかしながらベネターのこのパラグラフの議論は二つの点で間違っている。

第1点。「ちょうど、剥奪された結果として快の不在が *worse* という意味で *bad* であるのと同様に、剥奪の結果としてではない快の不在は *not worse* という意味で *not bad* なのである」の文章である。この前半では、ある存在する人物 X について、その人物から快が剥奪されて快が存在しなくなっている場合は、その人物に快が存在する場合と比較して、*worse* だと言っている。そのことは、「*the absence of pleasure is not bad unless there is somebody for whom this absence is a deprivation*」と書かれていることから分かる。すなわち、快の剥奪の結果としての快の不在が *bad* になるのは、その不在が剥奪になるところの誰かが「存在する *there is somebody*」ときだからである。よって、この前半では、存在する人物 X において、快がある場合と、快が剥奪された場合の比較がなされている。ところで後半の文章の「剥奪の結果としてではない快の不在」とは、そもそも人物 X がけっして存在しないがゆえに快が不在である場合のことを指している（それがシナリオ B の意味である）。その場合と、人物 X が存在していて快がある場合が比較されるのである。ベネターはこの前半から後半を導出しているが、ここに誤りがある。前半は「存在する人物 X に快がある場合」と「存在する人物 X から快が剥奪された場合」の比較であるが、後半は「存在する人物 X に快がある場合」と「けっして人物 X が存在しない場合」との比較である。前半と後半は存在に関する様相がまったく異なるがゆえに、前半の論理を後半に適用することはできない。（たとえ快の剥奪と同時に人物 X が消滅して非存在になったとしても、そのような「*those who are no longer existing*」と、けっして存在しない人物「*those who never exist*」は明確に区別しなければならないというのがベネターの主張であった¹²⁾。まさにそれが単純には適用できないということこそ、ベネターが B NHB 第2章で延々と主張してきたことではなかったか。したがって「剥奪の結果としてではない快の不在は *not worse* という意味で *not bad* なのである」とは、単にベネターの導入した個人的直観を繰り返しているだけであり、何かの論理によって別の正しい命題から導出されたものではない¹³⁾。

第2点。[P.39, para.3]でベネターは (4) を内在的 *intrinsically* には「悪いのでもないし、善いのもない *not good, but not bad either*」としていた。これは[PP.41-

¹²⁾ 本論文[PP.30-31, para.1]参照。

¹³⁾ この点について吉本陵は、私とはまた異なった視点から「剥奪」の議論の難点を指摘している。吉本陵(2014)参照。

42, para.2]で *neutrality* と言い換えられているし、【補足1】においてもそうである。しかしながら、「ちょうど、剥奪された結果として快の不在が *worse* という意味で *bad* であるのと同様に、剥奪の結果としてではない快の不在は *not worse* という意味で *not bad* なのである」という箇所において、(4)の「*not good*」の側面は考慮されていない。*not good*の検討がどこかに消滅してしまっているのである。したがって、(4)はやはり *intrinsically* には *not bad, but not good either* として *neutral* 以外の何ものでもあり得ず、(2)と(4)の比較は、存在者における *good* と非存在者における *neutral* の比較となる。そしてこの比較の結果から(4) *is not worse than* (2)が導出されるとする根拠を、ベネターは一切示し得ていないのである。すなわち、このパラグラフの(2)と(4)の比較において繰り返されているのは、(4) *is not worse than* (2)というベネターの個人的直観でしかないのである。

以上の2点より、パート4におけるベネターの論証は成立していない¹⁴。

6 *Better Never to Have Been* 第2章に関する結論

以上より、ベネターの誕生害悪論は、パート2の「確からしい四つの非対称性の議論」、パート3の「対称性モデルが成立しないことからの背理法的論証」、パート4の「シナリオAとシナリオBの比較」のすべてにおいて、きちんと成立していない。

これらのうち、パート2とパート3については、ベネターはみずからのセオリーが他のライバルセオリーよりも優越していることを示そうとしており、その論証に難点があったとしても、ただちにベネターのセオリーの不成立を意味するわけではない。しかしながら、パート4については、ベネターはシナリオBがシナリオAより相対的に優越していることを論証しているような外見を装っているけれども、実際のところそれは論証としては成立しておらず、彼の *coming into existence is always a harm* という誕生害悪論の命題は未立証のまま終わったと言わざるを得ない。(4)が(2)より相対的に *not worse* であること

¹⁴ ベネターは語っていないが、残された解釈の可能性としては、*not worse* とは、(4)を(2)より *worse* だと結論しようとする比較は必然的に壊れる、だから *not worse* なのだという解釈があり得る。しかしながら、その逆に(4)は(2)より *better* だと結論しようとする比較もまた同じ理由で壊れなくてはならないはずだ。だとすれば(4)は(2)より *not better* となる。すなわち(4)と(2)のいかなる相対的比較も必然的に壊れてしまい、なんの結論も出ないことになる。この場合、シナリオAとシナリオBの比較は、(1)と(3)のみを比較すればよいことになり、シナリオBのほうが *better* であるという結論になる。これは苦痛回避論・ネガティブ功利主義の構造と同じことになるが、これはベネターのセオリーではない。また、(4)と(2)で比較が壊れるのなら、なぜ(3)と(1)で比較が壊れないのかを説明しなければならない。

は、ベネターの個人的直観としてしか導入されておらず、それを根拠づけることのできる論理的な理由をベネターは示し得ていないからである。

ベネターに反論してきた多くの哲学者が考えるように、ベネターの議論には深刻な難点があり、妥当な議論としては成立していないと結論づけてよいだろう。

7 補足 1 および補足 2

【補足 1】

ベネターは、2012年に論文「考えられるすべての害—反出生主義のさらなる擁護」を刊行し、彼に寄せられた多数の反論について逐一再反論をしている。その中で、スコット・ブリルへの再反論のなかでベネターは自説についての重要な補足と改訂を行なっているので見ておきたい。(論文の頁とパラグラフ番号を以下に示す)。

[P.144, para.3]

それはベネターの4象限図の解釈についてである。ブリルは(4)を *intrinsic* な *non-badness* と解釈しているが、それは誤解であるとベネターは言う。「非存在者における快の不在は、実際、*intrinsically* には *neither good nor bad* である。それは *intrinsically value-neutral* なのである」。

このようにベネターは述べ、BNHB [P.39, para.3]で(4)を内在的には「悪いのでもないし、善いでもない *not good, but not bad either*」としていたのを再確認する。そしてさらに、(4)は内在的には「価値中立 *value-neutral*」であるとするのである。したがって、BNHBで(4)を *not bad* だとしていたのはやはり誤解を招きやすい方便だということになる。

ベネターは、ある象限が持つ内在的な善し悪しと、相対的な善し悪しが異なってもぜんぜんかまわないと言う。たとえば、「(1)における痛みは *intrinsically bad* であるが同時に(3)と比較して *relatively bad* でもあるのだ。同様に、私は(3)を *intrinsically neutral* だが(2)よりも *relatively good* すなわち *better* だと考える」。(ベネターがここで(2)と書いているのは明らかに(1)の間違いである。痛恨のミスと言えよう)。

さて、ベネターは(3)を内在的に *neutral* であるとしているが、これはBNHBの[P.39, para.2]における(3)の記述、すなわち、「存在の痛みを避けるのは単に '*not bad*' である以上のことだ。それは *good* なのである *Avoiding the pains of existence is more than merely 'not bad'. It is good*」と一見矛盾している。ただし、ここもまた(4)の *not bad* の情報量の多さによる選択と同じように、(3)は

内在的には **neutral** だが相対的には (1) より **better** であるということを **good** の一言で表現できるからその単語を選択した、という解釈になるだろう。

この点についてクリス・カポシは、(3) が内在的に **good** であるか **indifferent** であるかは、それが語られるナラティブに依存すると指摘し、ベネターが (3) をあるときは **neutrality** とし、あるときは **a good thing** としていることの矛盾にベネターは気づいていないと批判している¹⁵。ベネターはこれに対して2013年論文で、(3) の **good** は **comparatively good** すなわち (1) よりも **better** だという意味だと応答している¹⁶。この応答を見るかぎり、やはりベネターは (3) の **good** を内在的な意味で用いてはおらず、(1) との比較において相対的に **better** であるということを表わすために **good** を用いたということになる。

2012年論文に戻れば、(4) についてベネターは言う。「そして私は (4) の **non-badness** を **both intrinsic and relative** と解する。((4) の) 不在の快は **intrinsically** には **neither good nor bad** であるが、(2) における快の存在より悪いわけではない (**not worse than**) 。とは言え、私が (4) を “**not bad**” と描写するときに、私は (4) の **intrinsic value** のことを言っているのではなく、そのかわりに (4) が (2) より “**not worse**” であることを言っているのである。というのもこれこそが存在と非存在の比較のキーになることだからだ」。

これは、BNHB [P.39, para.3]において (4) をなぜ **not bad** と描写するのかを説明した箇所を、別様に説明し直したものである。すなわちベネターは、BNHBで (4) を **not bad** と言ったのは、「**intrinsically** には **neutral**」かつ「**relatively** には **not worse**」ということを一言で言いたくて「**not bad**」と言ったのだ、と説明し直したのである。

以上を分かりやすくするために、私が図3と図4を作成してみた。図3は内在的な善悪を表わしたものであり、図4は相対的な善悪を表わしたものである。

¹⁵ Kaposy (2009), pp.106-107.

¹⁶ Benatar (2013), p.128.

Intrinsically speaking

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Bad)	(3) Absence of pain (Neutral)
(2) Presence of pleasure (Good)	(4) Absence of pleasure (Neutral)

Figure 3.

Relatively speaking

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Worse)	(3) Absence of pain (Better)
(2) Presence of pleasure (Not better)	(4) Absence of pleasure (Not worse)

Figure 4.

これがそもそもベネターの言いたかったことである。(図3はベネターが文章で明示的に書いているが、図4における(2)の not better についてベネターは明

示的に書いていないので、私が書き入れた。この(2)が not better だということとはBNHB [PP.41-42, para.2]には記されている)。

そしてBNHB [PP.37-38, para.1]の基本的非対称性の図 2.1 において、(3)が good になっているのは、(1)と比較したときに(3)が better であることを good という言葉で表現したのであり、(4)が not bad になっているのは、(2)と比較したときに(4)が not worse であることを not bad という言葉で表現したのだ、というのがベネターの結論である。そして intrinsically に言えば、(3)も(4)も neutral すなわち not good but not bad either だというのである。ベネターのこのようなまぎらわしい記法は、これまで大きな混乱を読者に与えてきただけでなく、(4)の評価についての自身の論法が誤りに陥ってしまった大きな原因でもあったのである。

そしてはこの図によって(4) is not worse than (2)が論証できるかということ、それはやはり不可能である。すでに述べた私の批判点の2点はともに、この図によって解決されないからである。

以上によって明らかになるのは、相対的比較の図4の(2)と(4)の関係、すなわち、「(4) is not worse than (2)」こそが、ベネターが一番最初から無根拠に前提している唯一の直観であるということだ。この「(4) is not worse than (2)」という命題は、シナリオ B がシナリオ A より優越するという誕生害悪論の結論とほぼ等しい。すなわち、ベネターの議論を、誕生害悪論の論証というふうに理解したならば、ベネターの議論は導きたい結論を前提に置くという論点先取以外の何ものでもない。したがってベネターの議論は、誕生害悪論の論証ではないと言わざるを得ない。ではベネターはいったい何を議論しているのかと言え、ば、「(4) is not worse than (2)」という直観を前提したならば、確からしい4つの非対称性をライバルセオリーよりもうまく説明できるという比較優位の主張をしているのである。そして自説が他説よりも比較優位であるから、「(4) is not worse than (2)」と「(3) is better than (1)」から導かれるところの、シナリオ B がシナリオ A に優越するという結論、すなわち「生まれてくるのはつねに害悪である」という誕生害悪論にもっとも説得力があると主張しているのである。これがベネターの議論の全貌である。

【補足 2】

ベン・ブラッドレイは、2010年の論文「ベネターと Betterness の論理」において、ベネターの「(4) is not worse than (2)」はこれまでの preference logics の議論に照らして間違っていると看做する。ブラッドレイは、BNHB [PP.41-42, para.2]における善悪の比較の議論の誤謬を指摘しており、私と同じ点に着目している。ただしブラッドレイの論文は discussion note なので綿密な議論は展開され

ていない。

ベネターはこのブラッドレイの反論に対して2013年の論文「依然として生まれてこないほうが良かった：（さらに多くの）私への批判に応答する」で再反論を行なっている。

ベネターは、ブラッドレイは「人物 X が存在したうえでその人物に快や痛みがない場合」と、「人物 X が存在しないからそもそも快や痛みがない場合」を区別できていないとして、次の図を提示している。

	Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(5) Absence of Pain (Good)	(1) Presence of Pain (Bad)	(3) Absence of Pain (Good)
(6) Absence of Pleasure (Bad)	(2) Presence of Pleasure (Good)	(4) Absence of Pleasure (Not bad)

Benatar (2013) Fig. 2 The basic asymmetry amplified

この図では、4象限図に（5）と（6）が付け加えられている。このとき、（5）は人物 X が存在した上でその人物に痛みがない場合であり、（3）は人物 X が存在しないからそもそも痛みがない場合」である。（6）と（4）も同様である。

この論点は、BNHB [P.41, para.1]でベネターが説明しているポイントのひとつを明確化したものである。ベネターはこの6象限図を、みずからの基本的非対称性の拡張図であるとして、「（5）と（6）は基本的非対称性の図では隠れていたのを、今回明示した」と書いている¹⁷。この図の読み方も気をつけなくてはならない。（5）が good となっているのは、intrinsicallly には neutral であるのだが、（1）の bad と比べれば relatively better であるという意味で good という語を選んだ、というのがベネターの意味するところである。同様に、（6）が bad となっているのは、intrinsicallly には neutral であるのだが、（2）の good と比べ

¹⁷ Benatar (2013), p.136.

れば *relatively worse* であるという意味で *bad* という語を選んだ、というわけである。

もちろん、この図によっては、ベネターの誕生害悪論の難点はまったく克服されない。

8 ベネターはどのように議論を組み立てるべきであったのか

本章では、シナリオ B がシナリオ A よりも優越するという結論を、「(4) *in not worse than* (2)」すなわち「*intrinsically neutral* な (4) は *intrinsically good* な (2) よりも悪くない」という不思議な直観を用いずに導出できるような、新たな議論を提案する。その際には、快と痛みを分離させて比較考察できるとするベネターのやり方をそのまま受け入れ、さらに4象限図のやり方もそのまま受け入れることとする。私自身は、このようなやり方は間違っていると考えるが、その疑問はとりあえず棚に上げて、ベネターの議論枠組みに沿ったままで以下の考察を行なう。

そのために、私はまず多くの人が賛同するであろう次の直観からスタートする。それは、「存在している人物 X にとって痛みがないのは善いことだが、存在している人物 X にとって快がないのはとくに善くも悪くもない」という直観である。この直観は *intrinsically* な次元において成立する。これは図5によって表わされる。この4つの象限はすべて人物 X が存在しているときである。そして4つの象限すべては *intrinsic* な善悪を記入してある。

Intrinsically speaking

Scenario A (X exists)

(1) Presence of Pain (Bad)	(5) Absence of Pain (Good)
(2) Presence of Pleasure (Good)	(6) Absence of Pleasure (Neutral)

Figure 5.

まず（５）と（６）を比べてみよう。このとき、（５）では痛みがないのを **good** としているが、（６）では快がないのを **neutral** としている。この差は、最初に導入した直観「存在している人物 X にとって痛みがないのは善いことだが、存在している人物 X にとって快がないのはとくに善くも悪くもない」を表現したものである。そして（５）と（６）が非対称になっているのが、真の意味での快苦の非対称性の意味である（後述）。

ここで次のような疑問が生じるかもしれない。（１）の痛みがある場合にそれだけで **intrinsically bad** であるというのは不思議ではないけれども、（５）の痛みがない場合にそれだけで **intrinsically good** であるというのは不思議だ、という疑問である。痛みがないのはそれ自体としては善くも悪くもなく、何か別の状態と比較してはじめて **good** であると言えるはずだという疑問である。しかしそのような考え方を取るのなら、同じことは（１）に対しても言えるはずで、痛みがあることもまたそれ自体としては **intrinsically** には善くも悪くもなく、何か別の状態、たとえばもっと軽い痛みと比較してはじめて **bad** であると言えるはずだ、ということにならないとおかしい。

別の言い方をしてみよう。痛みだけに **intrinsic** に注目した場合、（１）の痛みがあるときは、痛みがない場合との比較とは関係なしに、自動的にその痛みそれ自体を否定したくなるから **intrinsically bad** である、という言い方ができる。

（２）の快があるときも、快がない場合との比較とは関係なしに、快があること

それ自体を肯定できるから **intrinsically good** である、という言い方ができる。この二つはベネターも承認している。だとすれば、(5) と (6) についても同じようなことが言えるはずである。

すなわち、快も痛みも感じていないときを想定したうえで、痛みだけに焦点を当ててみると (5)、痛みがないという状態にとどまっていたいと思うのは普通のことであろう。痛みがないのは素晴らしいことだから、この状態がずっと続いてほしいと願うのは普通のことであろう。これは痛い状態との比較とは無関係に成立する判断である¹⁸。したがって (5) は **intrinsically good** であると言える。次に、快だけに焦点を当ててみると (6)、快がないという状態にとどまっていたいとはとくに思わないと同時に、快がないという状態を避けたいともとくに思わないのは普通のことであろう。快がないのは素晴らしいからこの状態からぜったいに動きたくないとは思わないだろうし、快がないのは我慢できないからどうしても快がない状態を拒否したいとも思わないだろう。これは快がある状態との比較とは無関係に成立する判断である。したがって (6) は **intrinsically neutral** であると言える。以上の (5) と (6) の差異が、快苦の非対称性である。

これが図5の意味である。もちろん快苦がある場合と、ない場合を比較することもできる。(1) と (5) を比較すれば、(5) のほうが **better** であることが分かる。では (2) と (6) を比較するとどうかというと、これは (2) のほうが **better** になる。つまり相対的評価では、(1) は (5) より **worse** であり、(2) は (6) より **better** であることになり、図5のシナリオA とシナリオB の全体を比較したときに、どちらが優越するのか一義的には決まらなくなる。

そこで、(5) と (6) を上下逆転させてみよう。すると次の図のようになる。

¹⁸ もしこれを否定するのならば、(1) の判断もまた相対的にしか成り立たないとして否定しなくてはならないはずだ。

Intrinsically speaking

Scenario A (X exists)

(1) Presence of Pain (Bad)	(6) Absence of Pleasure (Neutral)
(2) Presence of Pleasure (Good)	(5) Absence of Pain (Good)

Figure 6.

この図で左右を比べてみるとどうなるだろうか？ まず下段の（２）と（５）はともに good であるから、善悪の価値は等しい。そして上段の（１）と（６）は、（１）が bad で（２）が neutral であるから、右側のほうが明らかに優越している。したがって、上段と下段を合わせれば、シナリオ A よりもシナリオ B のほうが優越しているとはっきりと言える。

これを日常言語に置き直してみれば、もっと分かりやすくなるだろう。下段は「快があるのは善く、痛みがないのも善い。したがってこの二つに優劣の差はない」となる。上段は「痛みがあるのは悪いが、快がないのはとくに善くも悪くない。したがって右側が左側よりも優越している」となる。この上段もまた、我々が日常感覚でもっとも納得できる快苦の非対称性のひとつである。

そして非対称性について言えば、（１）から（６）を見たときに（６）が bad にならないこと、（２）から（６）を見たときに（６）が bad にならないこと、（５）から（６）を見たときに（６）が bad にならないこと、この３つこそが、存在する人物 X についての真の基本的非対称性なのである。

この上段と下段を合わせて日常言語で表現すれば、「快もあるが痛みもある人生よりも、快も痛みもない人生のほうが優れている」となる。快も痛みもない人生とは麻酔薬で感覚が麻痺した状態のことではなく、ちょうど穏やかな午後のひとときのように、とくに快も痛みも感じず平安な心境で生を過ごしているような状態のことを指す。さらには、原始仏教で言うような有余涅槃、すなわち

この世にまだ生きているのだけれども執着を断滅してしまったがゆえにたとえ快刺激や痛み刺激があったとしてもそれらが喜びや苦しみをもたらすことがまったくない状態、と解釈することもできるかもしれない。生きているうちにこのような状態に達したいという修行者の気持ちが理解できる人も多いのではないだろうか。

さて、ここでもうひとつベネターとは異なった考え方を導入する。ベネターは人物 X が存在して快や痛みがないことの善悪と、人物 X が存在しないがゆえに快や痛みがないことの善悪を、きちんと分けて考えないといけないと主張した。それに対して、私はもうひとつ別の道筋を提案する。それは、人物 X が存在して快や痛みがないことと人物 X が存在しないがゆえに快や痛みがないことはきちんと分けて考えないといけませんが、しかしながら、人物 X が存在して快や痛みがないことの善悪と、人物 X が存在しないがゆえに快や痛みがないことの善悪はまったく同じであると考えてもよいという道筋である。言い換えれば、人物 X が存在するときと人物 X が存在しないときのあいだに存在論的差異はあるが、人物 X が存在するときの善悪の不在と人物 X が存在しないときの善悪の不在のあいだに善悪の価値論的差異はないとするのである。そのときにシナリオ A とシナリオ B の善悪の関係がどのようになるのかを考察してみたい。

その道筋を進むために、まず図 6 の右側を図 3 のシナリオ B に当てはめてみるのである。すなわち、図 6 の (5) を、図 3 のシナリオ B の右下の象限へと代入し番号を (3) に変え、図 6 の (6) を、図 3 のシナリオ B の右上の象限へと代入し番号を (4) に変える。すると図 7 が得られる。

Intrinsically speaking

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of Pain (Bad)	(4) Absence of Pleasure (Neutral)
(2) Presence of Pleasure (Good)	(3) Absence of Pain (Good)

Figure 7.

この図7が何を意味しているのかというと、「人物 X が存在するときに快がない」場合と「人物 X が存在するときに痛みがない」場合の非対称的な関係 (**neutral** 対 **good**) を、そのままの形で、「人物 X が存在しないがゆえに快がない」場合と「人物 X が存在しないがゆえに痛みがない」場合の非対称的な関係に置き換えた図である。ベネターは存在と非存在の善悪が同型になるこのような置き換えは間違っていると主張するだろうが、これまでの検討で、そのベネターの見解もまた彼の個人的直観に依拠しているだけであることは明らかになっている。私はあえてこのような同型の置き換えを行なったら何が言えるかを見てみたい。

再度説明すれば、この図7では、人物 X が存在するシナリオ A と、人物 X が存在しないシナリオ B が比較されている。このとき (3) は、人物 X が存在しないがゆえに痛みがないので **intrinsically** に **good** である。(4) は、人物が存在しないがゆえに快がないので、それはとくに善くも悪くもなく、**intrinsically** に **neutral** である。

このとき、さきほどと同じようにして左右を比較してみる。まず、下段の(2)と(3)の比較についてはともに **intrinsically good** であるから、善悪の価値は等しい。上段の(1)と(4)の比較については、(1)が **intrinsically bad** で(4)が **intrinsically neutral** であるから、右側のほうが明らかに優越している。したがって、上段と下段を合わせれば、シナリオ A よりもシナリオ B のほうが優越し

ているとはっきりと言える。

これを日常言語に置き直してみれば、下段は「人物 X が存在して快を感じているのは善く、人物 X が存在しないがゆえに痛みがないのも善い。したがってこの二つに優劣の差はない」となる。上段は「人物 X が存在して痛みを感じているのは悪いが、人物 X が存在しないがゆえに快がないのはとくに善くも悪くもない。したがって右側が左側よりも優越している」となる。

この上段と下段を合わせて日常言語で表現すれば、「人物 X が存在して快と痛みがあるよりも、人物 X が存在しないがゆえに快も痛みもないほうが優れている」となる。これこそベネターが結論したかった命題「シナリオ B はシナリオ A より優越している」である。

ここで大事なのは、図 7 の場合、*intrinsic* な善悪の比較から、*relative* な善悪の比較が論理的に導出されており、その導出の過程に何の暗黙の前提も密輸入されていないということである。ここがベネターの議論と異なる点である。ベネターの場合、シナリオ B がシナリオ A よりも優越するという *relative* な善悪の比較は、*intrinsic* な善悪の比較から論理的に導出されたものではなかった。その結論はベネターの *relative* な次元の個人的直観の密輸入によって導かれていた。そこにあるのは論点先取であり、論理的導出ではない。この点ではベネターの議論よりも図 7 の議論のほうに優越性がある。したがって、もしシナリオ B の優越を結論したいのであれば、ベネターは図 7 のような議論を展開していくべきであったというのが、私の考えである。（存在と非存在の対比や快と痛みの対比において違和感のある点もあったと思うが、その違和感は私の議論に原因があるというよりも、ベネターのそもそもの 4 象限図の枠組みに原因があるのである）。

ただし、このやり方には少なくとも二つの問題点があるように見える。

第一は、本来比較されるべきは「痛みがあるかないかの比較」((1)と(3))および「快があるかないかの比較」((2)と(4))であり、「痛みがある場合と快がない場合の比較」((1)と(4))および「快がある場合と痛みがない場合の比較」((2)と(3))は「快」と「痛み」という異なった概念を比較するカテゴリーミステイクに陥っており、本来行なってはならないはずだという疑問点である。

ところが、ベネター自身がこのような比較を行なっている箇所がある。すなわちベネターは BNHB [PP.43-44. para.3]で、(2)と(3)、(1)と(4)の比較について述べている。その箇所を訳出しておく。

我々は存在と非存在のあいだの相対的な優越性と非優越性について、他の方法で確かめることができる。それは元の 4 象限図で、(2)と(3)、(4)と(1)を比較することによってである。存在にとっても、非存在

にとっても双方に益があることが分かる。存在者が快を経験するのは **good** である。非存在によって痛みが避けられるのもまた **good** である。しかしながら、それは全体図の一部にすぎない。生まれてこないことはまったく悪くないが、生まれてくることには何かしら悪いことがつきまとうのであるから、以上すべてを考慮すれば、非存在のほうがより好ましいと思えるのである。

ベネター自身が (2) と (3)、(1) と (4) の比較を行なっているのだから、快の善悪と痛みの善悪を比較すること自体は、ベネターにとっては問題とならないはずである。したがって、第一の問題点はクリアされる。(ただし引用部の最後の文章は正確には、「存在者が痛みを経験するのは **bad** であるが、非存在によって快が達成できなくても **not bad** であるのだから、以上すべてを考慮すれば、非存在のほうがより好ましいと思えるのである」となるはずである)。

第二の問題点は、図 6 の「人物 X が存在するときに快がない場合と人物 X が存在するときに痛みがない場合の非対称的な関係 (**neutral** 対 **good**)」を、そのままの形で、図 7 の「人物 X が存在しないがゆえに快がない場合と人物 X が存在しないがゆえに痛みがない場合の非対称的な関係」に適用するのは、存在と非存在の決定的な差異を無視しているので間違いである、という疑問点である。これはそもそも図 7 が成立し得ないはずだという疑問である。

この点を解消するためには、図 6 の (5) と (6) を図 3 に代入するのをあきらめるしかない。そして、いったん図 3 にまで戻って、(3) と (4) の象限の上下を入れ替え、次の図 8 を作成しなければならない。

Intrinsically speaking

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of Pain (Bad)	(4) Absence of Pleasure (Neutral)
(2) Presence of Pleasure (Good)	(3) Absence of Pain (Neutral)

Figure 8.

ところが、この図8では、(2)と(3)の比較において、どうして(3)の *intrinsically neutral* のほうが(2)の *intrinsically good* よりも優越するのかをクリアーには言うことができない。それを言おうとすると、結局、ベネターの個人的直観を密輸入するしかなくなり、BNHB [PP.41-42, para.2]とまったく同じ難点を抱え込むことになる。したがって図8においては、シナリオBがシナリオAに優越することを導出できない。ベネターが欲している結論を導けないのである。

だとすれば、結局のところ、ベネターには次の二つの道筋しか残されていないことになる。

ひとつは、やはり図7のように、(3)を *intrinsically good* と考える道筋である。この道を選べばシナリオBがシナリオAよりも優越するという結論を導くことができるが、その代償としてベネターは(3)の *intrinsical* な善悪についての自説を撤回しなくてはならなくなる。(3)は *intrinsically neutral* ではなく *intrinsically good* となってしまうのである。

もうひとつは、(3)も(4)も *intrinsically neutral* であるという自説を貫く道筋である。しかしその代償としてベネターは、シナリオBがシナリオAに優越するという結論を導くことができなくなる。相対的比較に関する個人的直観を密輸入しないかぎり、その結論は導かれないのである。

したがって、いずれの道筋を取るにせよ、ベネターが論の整合性を確保しよ

うとすれば、彼は何かを犠牲にせざるを得ない。これが本節の議論から出てくる結論である。

ところで、もし図6から図7に至る議論が正しいとすれば、その副産物として、非対称性についての新たな理解が得られることになるので、それを見ておきたい。

図6と図7から分かるのは、存在者の次元における比較であろうと、存在者と非存在者のあいだの比較であろうと、それにはまったく無関係に、「非対称性は4象限のうちの、「(4) 快の不在」と「その他(1)(2)(3)」のあいだで成立する」ということである。すなわち(3)と(4)の比較を例にとって言えば、「人物Xが存在するときに痛みがないのは善いことだが、人物Xが存在するときに快がないのはとくに善くも悪くもない」という非対称性と、「人物Xが存在しないがゆえに痛みがないのは善いことだが、人物Xが存在しないがゆえに快がないのは善くも悪くもない」という非対称性は、同一の非対称性とみなしてよいということである。このことは、(1)と(4)、(2)と(4)の比較についても同じように言える。すなわち、人物Xが存在するか存在しないかということは、快苦の非対称性には一切影響を及ぼさないのである。

別の視点から言い換えれば、快苦の非対称性とは、「人物Xが存在する場合と、人物Xが存在しない場合とで、快苦の善悪が同型あるいは鏡像関係にならない」ことを意味しているのではない、ということである。一例をあげると、ベネター(2013)のFig.2における「人物Xが存在して痛みがない(5)と人物Xが存在して快がない(6)の関係(=good対bad)」と、ベネターの図3における「人物Xが存在しないがゆえに痛みがない(3)と人物Xが存在しないがゆえに快がない(4)の関係(=neutral対neutral)」が同型にも鏡像関係にもならないことをもって、快苦の非対称性と呼んではならないということである¹⁹。

以上のように、快苦の非対称性は、そもそも存在者と非存在者のあいだから生じてきたわけではないかもしれないということが、以上の議論から見えてくる。この点はまだ十分に追い詰められていないが、本論文の考察から付随的に見えてきた非常に興味深い論点である。

さて、このような私からの批判に対して、ベネターは次のように応答する可能性がある。すなわち、自分が行なったのは誕生害悪論が何か別のさらに基底的な命題群から導出されるという論証ではなく、パート2で見た4つの確からしい非対称性を説明できるように見えるいくつかのセオリーのうち、自分のセオリーが4つすべてをもっともうまく説明できるとする議論である、と。

たしかにそれがベネターの意図するところであったと言える。だとすれば、

¹⁹ もちろんこの議論は図6と図7が正しいと仮定したときにのみ成り立つものである。したがって本文では副産物と表現した。

図7は、4つの確からしい非対称性をどのくらい説明できるであろうか。以下、ベネターの4つの確からしい非対称性がまったく問題なく成立するとあえて仮定したうえで、図7がその4つの非対称性を説明できるかどうかを検討してみることにする²⁰。

第一の非対称性（生殖義務の非対称性）を見てみよう。

第一の非対称性とは「苦しむ人々を生み出すのを避ける義務はあるが、幸せな人々を生み出す義務はない」というものであった。まず苦しみに注目すると、「苦しむ人々を生み出す」とは、人物 X が存在しない状態（これは（3）および（4）によって表現される）から、（1）の「人物 X が存在して苦しみがあがる」という bad な象限へと着地することである。このような存在する人物 X の「bad への着地」は、かならず避けなければならないと言える。したがってそのような着地を避ける義務は存在する。次に「幸せな人々を生み出す」とは、人物 X が存在しない状態（これは（3）および（4）によって表現される）から、（2）の「人物 X が存在して幸せがある」という good な象限へと着地することである。このような存在する人物 X の「good への着地」については、着地しないことによって害を受ける人物は存在しない。したがって、着地すれば益を受ける人物 X が誕生するから着地してもよいと同時に、着地せずに元の象限にとどまったとしてもそれによって害を受ける人物は存在しないので、着地するべきであるということもまたできないはずである。したがって、少なくともそのような着地を実行する義務は存在しない。以上の二つを合わせれば、「苦しむ人々を生み出すのを避ける義務はあるが、幸せな人々を生み出す義務はない」という結論が得られるであろう。これによって、図7は第一の非対称性を説明することができる。

第二の非対称性（期待される益の非対称性）を見てみよう。

第二の非対称性とは、「生まれてくる子どもに益があるだろうという理由でもって子どもを産むのは（不整合ではないとしても）奇妙であるが、生まれてくる子どもが苦しむだろうという理由でもって子どもを産まないのは奇妙ではない」というものであった。

まず苦しみに注目すると、「苦しむ子どもを生み出す」とは、人物 X が存在しない状態（これは（3）および（4）によって表現される）から、（1）の「人物 X が存在して苦しみがあがる」という bad な象限へと着地することである。このような存在する人物 X の「bad への着地」を、子どもが苦しむだろうという理由で避けるのは奇妙ではない。次に「生まれてくる子どもに益がある」とは、人物 X が存在しない状態（これは（3）および（4）によって表現される）から、

²⁰ すでに述べたように、私は4つの確からしい非対称性のうち、ベネターの言う意味で成立しているのは第一の非対称性のみだと考えている。

(2)の「人物 X が存在して益がある」という good な象限へと着地することである。このような存在する人物 X の「good への着地」については、着地しないことによって害を受ける人物は存在しない。したがって、着地しなくてもべつに誰も被害を受けない。それにもかかわらず、生まれてくる子どもに益があるだろうという理由で、あえて子どもを産むのは、もちろん不整合ではないけれども、その無理矢理感において奇妙な点があると言わざるを得ない。

以上の二つを合わせれば、「苦しむ子どもを生み出すという理由で子どもを産まないのは奇妙ではないが、生まれてくる子どもに益があるという理由で子どもを産むのは（不整合ではないとしても）奇妙である」という結論が得られるであろう。これによって、図 7 は第二の非対称性を説明することができる。

第三の非対称性（回顧的な益についての非対称性）を見てみよう。

第三の非対称性とは、「不幸な子どもが生まれてきたことを親が残念に思う regret のは、子ども自身のことには思いをはせて残念に思うのだが、幸せな子どもが生まれてこなかったことを親が残念に思うのは、親自身の不幸を思って残念に思うのであって子ども自身のことには思いをはせて残念に思うのではない」というものであった。

まず不幸な子どもが生まれてくるとは、人物 X が存在しない状態（これは (3) および (4) によって表現される）から、(1) の「人物 X が存在して苦しみがある」という bad な象限へと着地することである。この着地によって不幸な子どもが存在するようになるのだから、親がそのような存在する子どもの不幸を残念に思うのは当たり前のことである。次に幸せな子どもが生まれてこないとは、人物 X が存在しない状態（これは (3) および (4) によって表現される）から、(2) の「人物 X が存在して幸せがある」という good な象限へと着地しないことである。このような存在する人物 X の「good への着地」が起きないことによって害を受ける人物は存在しない。したがって、残念に思うのは存在している親の不幸を思うからなのであって、非存在であるがゆえに幸せを経験できない子どものことを思うからではない²¹。

第四の非対称性（遠く離れた苦しみと幸せな人々の不在の非対称性）を見てみよう。

第四の非対称性とは、「遠くの島に人が住んでいて、その人たちが苦しんでいるとしたら、我々は悲しく思うだろう。しかしながら、もしその島が無人島だったとき、その島に幸せな人々が住んでいないと言って我々は悲しく思ったりはしないだろう」というものであった。

まず、遠くの島に人が住んでいて苦しんでいるとは、(1) の「人物 X が存

²¹ これは、非存在であるがゆえに害を受けない人物の善悪が反事実的に問えるということと両立する。残念に思うことはないけれども、善悪は問えるというわけである。

在して苦しみがある」という bad な象限を指している。このときに、その島で現に苦しんでいる人のことを我々が悲しく思うのは当然である。次に、無人島に幸せな人々が住んでいないとは、(4)の「人物 X が存在しないがゆえに幸せがない」という neutral な象限を指している。このとき、その島に人が住んでいないから幸せがないのは、我々の採用する非対称性によって、とくに善くも悪くもないのだから、我々がそのことを悲しく思ったりしないのは当然のことである。

以上の考察によって、ベネターの提出する4つの確からしい非対称性のすべてを、図7は説明することができる²²。さらに図7はベネターの不思議な個人的直観を採用しなくても済むこと、そして快苦の善悪についての評価法を人物 X が存在する場合と存在しない場合でわざわざ変えなくてよいこと、の2点においてベネターのセオリーよりも優れている。

本論文のすべての議論を総合すれば、ベネターは、シナリオ B がシナリオ A より優越することを主張したいのであれば、同等の説明力を有するにもかかわらずより問題点の少ない図7の方式を選択するべきであったということになる²³。

* 科学研究費「「人生の意味」と死の形而上学：分析実存主義の可能性とその批判的検討」（代表：北海道大学・蔵田伸雄）の2021年3月の研究会にて貴重なご意見をくださった方々に深く感謝したい。

* 本論文は、日本学術振興会科学研究費 20K00042、17H00828、20H01175 の成果である。

[次の誤りを訂正した。2021年5月22日]

28 頁下から9行目：good→bad

36 頁下から9行目：害を受けない→幸せを経験できない

²² ブーニンも自説が4つの非対称性をうまく説明できると主張したが、私もそれを同じことを試みてみたのである。ただしブーニンのセオリーと私の図7は異なる。

²³ 図7によって「シナリオ B がシナリオ A よりも優越する」ことは結論できるのだが、それはシナリオ B からシナリオ A が「生成する」ことが「生成しない」ことよりも善いということを通りかかると、というのが森岡正博(2020)の議論であった。したがって私は「生まれてこないほうが善い」という命題を支持するものではない。この点については同書を参照のこと。また、本論文では快と痛みを互いに独立変数として峻別するベネターの議論の枠組みに依拠して論を進めたが、そもそもこの枠組み自体が妥当なのかどうかの検討が必要であることは言うまでもない。私は快と痛みが相互変容するダイナミズムを視野に入れていない点においてこの枠組みは間違っていると考える。この点を鋭く指摘したのはニーチェである。ベネターの議論はニーチェ的な視点から脱構築されなくてはならない。

文献一覧

- Benatar, David (1997). "Why It Is Better Never to Come into Existence." *American Philosophical Quarterly*, 34(3):345-355.
- Benatar, David (2006). *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*. Oxford University Press.
- Benatar, David (2012). "Every Conceivable Harm: A Further Defence of Anti-Natalism." *South African Journal of Philosophy*, 31(1):128-164.
- Benatar, David (2013). "Still Better Never to Have Been: A Reply to (More of) My Critics." *Journal of Ethics* 17:121-151.
- Boonin, David (2012). "Better to Be." *South African Journal of Philosophy* 31(1):10-25.
- Bradley, Ben (2010). "Benatar and the Logic of Betterness." *Journal of Ethics and Social Philosophy*, March:1-5.
- Harman, Elizabeth (2009). "David Benatar. *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*." *Noûs*, 43(4):776-785.
- Kaposy, Chris (2009). "Coming into Existence: The Good, the Bad, and the Indifferent." *Human Studies*, 32(1):101-108.
- Magnusson, Erik (2019). "How to Reject Benatar's Asymmetry Argument." *Bioethics* 2019:1-10.
- 榊原清玄 (2021) 「ベネター型反出生主義へのブーニンによる反論の検討」『人文×社会』第1号、229-249頁。
- 鈴木生郎 (2019) 「非対称性をめぐる攻防」『現代思想』11月号、114-124頁。
- 森岡正博 (2013) 「「生まれてくること」は望ましいのか — デイヴィッド・ベネターの『生まれてこなければよかった』について」*The Review of Life Studies* 3:1-9.
- 森岡正博 (2020) 『生まれてこないほうが良かったのか? — 生命の哲学へ!』筑摩選書
- 森岡正博 (2021) 「反出生主義とは何か — その定義とカテゴリー」『現代生命哲学研究』第10号、39-67頁。
- 吉沢文武 (2019) 「ベネターの反出生主義をどう受けとめるか」『現代思想』9月号、129-137頁。
- 吉本陵 (2014) 「「人類の絶滅は道徳に適うか? — デイヴィッド・ベネターの「誕生害悪論」とハンス・ヨーナスの倫理思想」『現代生命哲学研究』第3号、50-68頁。